

平成二十六年四月二十五日(金)

第四四八回 史跡めぐり

新緑の季節

増林・花田方面を散策

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四四八回 史跡めぐり

新緑の季節

増林・花田方面を散策

● 日時 平成二十六年四月二十五日(金)

● 集合 午前八時三十分 越谷駅東口

● 参加費 七〇〇円 (片道バス代・資料代・保険料など)

● 案内者 常任理事 篠原陸郎

理事 山口正夫

実行委員 岩本勝義・中村幹子

コ ー ス

越谷駅→(バス)→総合体育館前
(以下徒歩約5~6*)

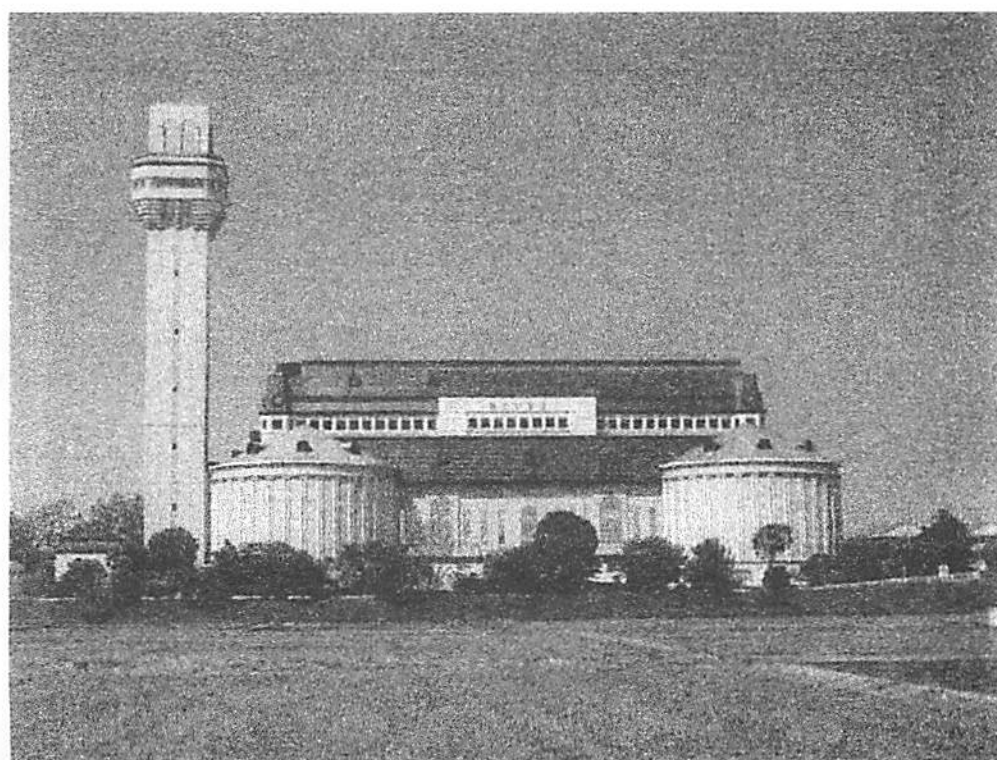
- 1 東埼玉資源環境組合(リユース)
- 2 勝林寺
- 3 林泉寺
- 4 城之上橋
- 5 鷹匠橋
- 6 スナッカラ地蔵
- 7 越谷能楽堂

能楽堂見学後解散(午後1時頃)

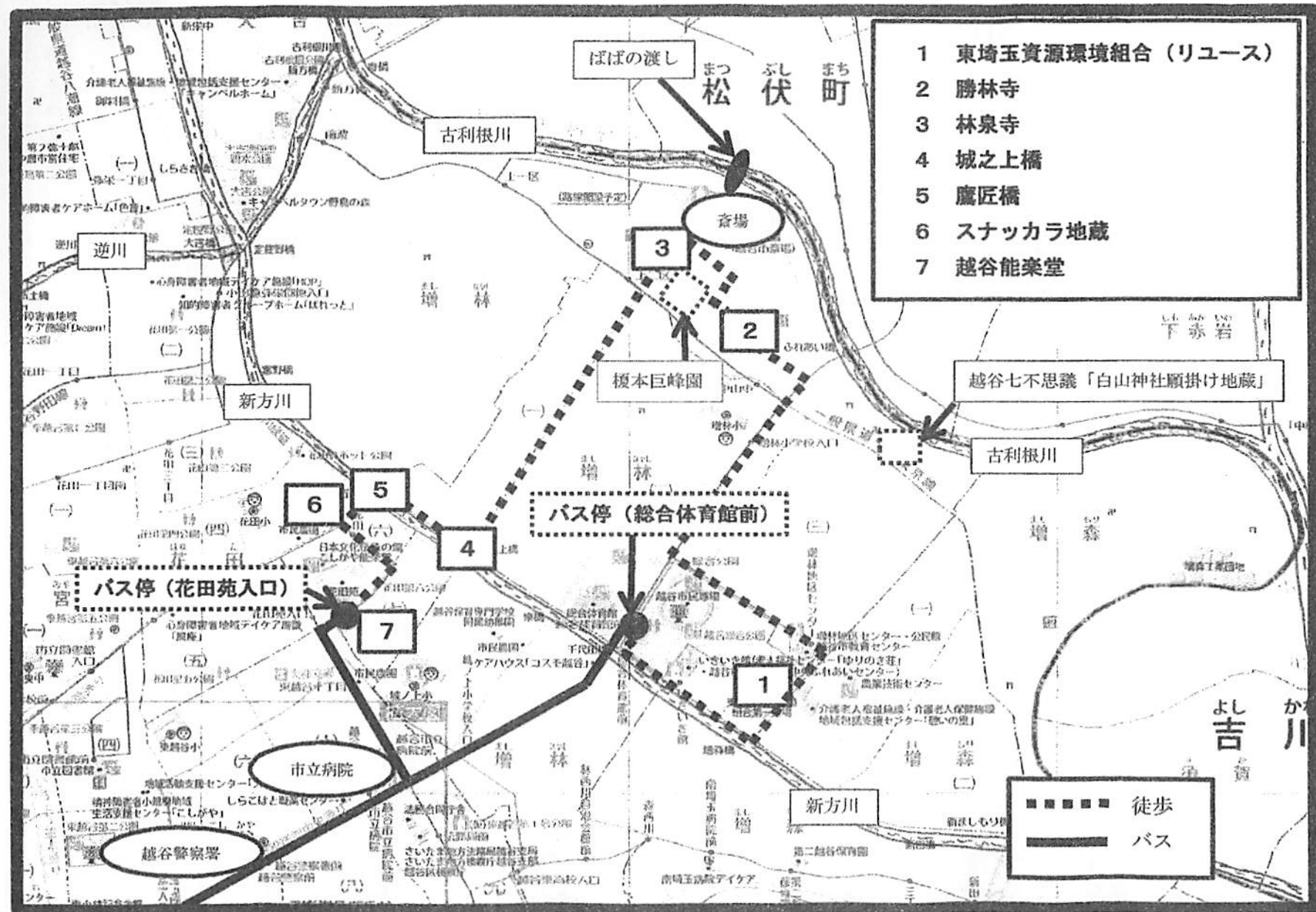
[花田苑入口より]各自負担

バス行先 越谷駅 (180円)

南越谷駅 (190円)



- 1 東埼玉資源環境組合 (リユース)
- 2 勝林寺
- 3 林泉寺
- 4 城之上橋
- 5 鷹匠橋
- 6 スナッカラ地蔵
- 7 越谷能楽堂



江戸期地図に
現行政区分で表示

増林地区



増林・花田の地区名変遷

江戸時代以前

増林：下総国葛飾郡新方郷増林村

花田：武蔵国埼玉郡越ヶ谷郷花田村

江戸時代

増林：武蔵国埼玉郡新方領増林村

花田：同 花田村

明治22年

南埼玉郡増林村（5村全体）

5村：増林・花田・増森・中島・東小林

昭和29年

増林：埼玉県越谷町増林

花田：同 花田

昭和33年

増林：埼玉県越谷市増林 [増林地区]

花田：同 花田 [増林地区]

増林

●増林村

・増林は古くは下総国新方庄の内に含まれていたが、後武蔵国となり江戸時代は武蔵国埼玉郡新方領の内に含まれていた。

・村高は1854石余、戸数が240戸と越谷地域では最大の村であった。田畑の比率は6・4で畑方が多かつたが、とくに古利根河畔の畑地では桃や梅の栽培が盛んであった。

・地名の由来は林が多い地から名付けられたとみられ、又は増林の増はめでたい字なのでこれを林の上につけたのか。また江戸時代の道しるべに「ましばやし」とあるので「マシ」が正しいようだ。

・江戸時代のなごりの小名(こな)(小字)がいくつもある。定使野じょうつかいの・城ノ上しろのえなど。また当時の「鷹匠」の鷹匠橋など。

・定使野は古い時代土豪などにつかえる使用人が住んでいた所、あるいは、それら使用人の食料をとる耕地をさしたようだ。

●ばばの渡し場(別名「中組の渡し場」とも)(増林く松伏上赤沼)

・ばばの由来は不明だが、渡し守に婆さんが居たからともいう。

・この「ばば」は「婆」か「馬場」か由来不明。

・(勝林寺台26世の祖母さんの話し)

「大正の頃は、渡しの料金は往復で大人3銭、子供1銭、自転車は10銭であった。地元の中組の人達は、年に2回、秋に玄米3升、夏に麦6升納めたので、無賃で渡れたという。」

・渡し場は戦後のカスリーン台風が襲ったS22年頃まで運行した。

●増林村と大吉村の逆川堤防切割騒動

・安政6年(1859)7月、連日の暴風雨で各川が異常な高水となり、とくに逆川は元荒川と古利根川の両押水にはさまれて水位は上昇し、ついに大吉村の堤防が押し流され、大吉・向畑地域に流入した。そして両地域の者たちが対岸(増林側)の堤を切り割って流れを増林側に流し、大吉方面の被害を少なくしようとした。これを目撃した増林側が殺気立ち一触即発の状況になった。この水論に対し、新方領内に多くの土地を持つ松伏村の名主石川民部が誠意を示さなかつたため増林側5ヶ村は連署をもって奉行所に訴訟を起こしている。この結果は不明であるが、結局示談内済の措置がとられたと見られる。

●学童疎開

太平洋戦争末期、学童疎開で越谷へは、東京神田の佐久間国民学校の児童が、昭和19年8月25日から終戦まで、教師2名、寮母4名に引率されて各寺に疎開した。

増林 勝林寺 3, 4年 男子 64名

増林 林泉寺 3, 6年 男子 100名

平方 林西寺 3, 5, 6年 女子 100名

■花田

はなだ

●花田村

地名の由来は、元荒川が花田村を天狗の鼻のように曲流していたところから、「鼻田」と付けられたという。また一説には越ヶ谷の鼻の先にあたるからとも、「越ヶ谷領の端はなの田」が由来とも。

■ 東埼玉資源環境組合（リユース）

● 組合市町

（5市1町） 越谷市・草加市・八潮市・三郷市・吉川市・松伏町

● 概要

・着工…平成3年 竣工…平成7年

・施設

第一工場

焼却処理上

越谷市増林

第二工場

し尿処理施設

八潮市八条

〃

ごみ処理施設

草加市柿木町

・管理者

越谷市長

・職員数

58人

・組合運営費

構成市町からの分担金、廃棄物処理手数料・電力

売払代金など

・その他

・煙突の高さ H1100m（4本の煙突）

・1日のごみ 一日平均790トン

・ごみ収集車 一日平均350台

・ごみの多い日 月曜日

● 事業費

・総事業費

約405億円

・建物・焼却炉

約360億円

・反射炉

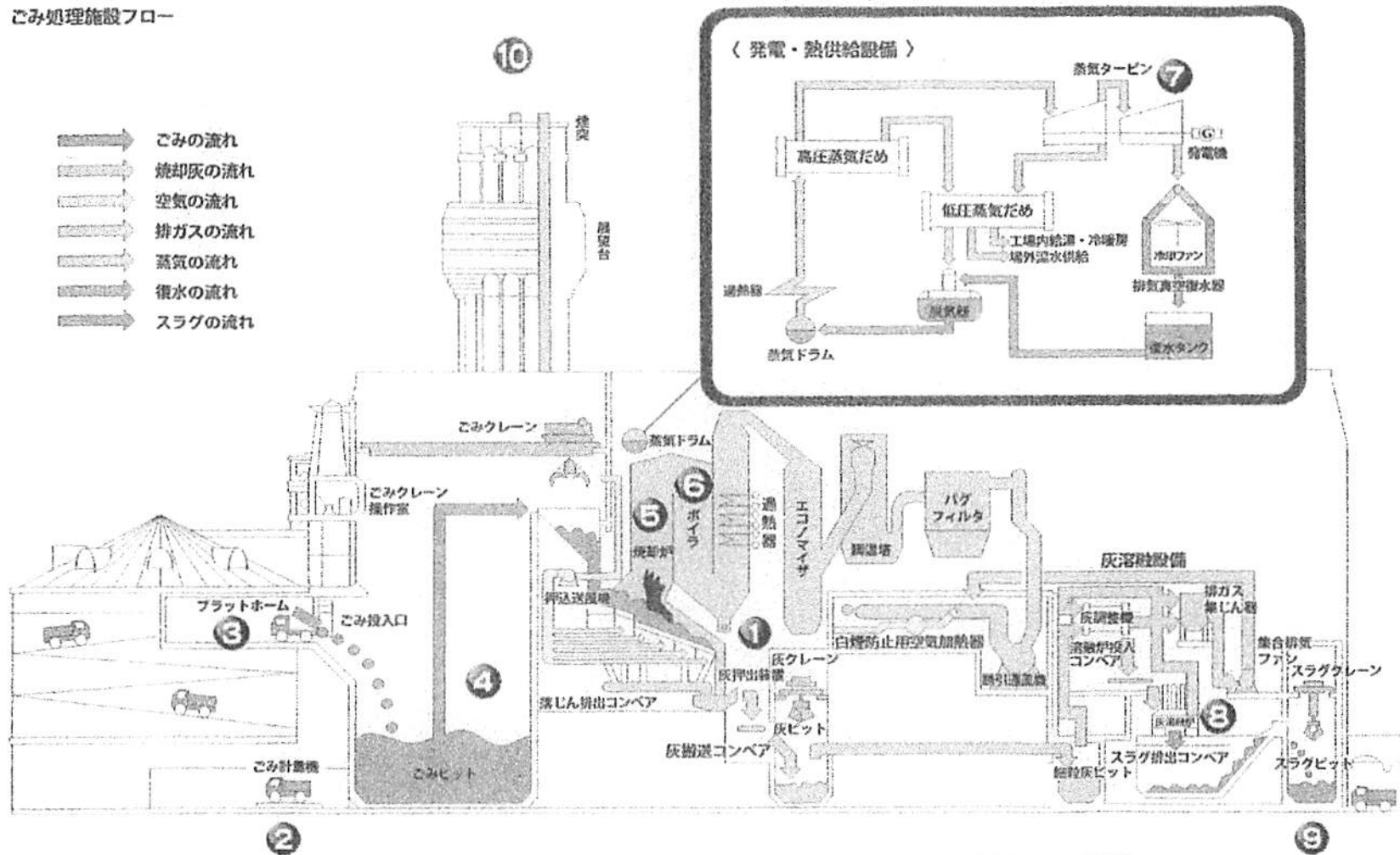
約45億円



展望台より「田のアート」を展望

ごみ処理施設フロー

- ➡ ごみの流れ
- ➡ 焼却灰の流れ
- ➡ 空気の流れ
- ➡ 排ガスの流れ
- ➡ 蒸気の流れ
- ➡ 復水の流れ
- ➡ スラッグの流れ



1. 中央操作室 2. ごみ計量機 3. プラットホーム 4. ごみピット 5. 焼却炉内
6. 廃熱ボイラ 7. タービン発電機 8. 灰溶融炉 9. スラッグピット 10. 煙突

勝林寺

●古文書『創立以来の事』の記録によると

・古文書『創立以来の事』は寛文12年(1672)の記録で、原文は勝林寺に残され、越谷市史に掲載されている。

・本尊十一面観音 法恩山 曹洞宗

・記録によると、万寿2年(1025)、源勝という僧が岩槻にある

・慈恩寺の末寺天台宗自耕院として観音菩薩を本尊に開山された。

・その後戦乱の時代となり寺は荒廃したが、天文元年(1532)

・岩槻の土豪渡江氏の系譜を受継ぐ黙堂閻契和尚が修復再興し、寺

・号を勝林寺と改め曹洞宗に転宗して開山した。その時渡江氏の守

・護仏として崇めていた岩槻城の十一面観音を譲り受けて本尊とし

た。

●仏教寺院の変遷 (山本泰秀氏記)

・鎌倉時代までは宗派も固定化されて来ていたが、やがて戦国時代になり、各地の寺も荒れ果てて、住職の多くも戦乱を避けて逃げ出し、無住になってしまいう寺が増加した。

・戦乱で寺も仏像も焼けずに残った住職のいない寺では、村人

・達が困っていた。

・諸国を遍歴していた僧達は、その時その寺の本来の宗派に関

・係なく別の宗派のまま無住の寺に入り、その寺の復興を始め

・たのである。

・勝林寺も、もともとの天台宗の本尊(観音菩薩)のまま、曹洞

・宗(本来本尊は阿弥陀如来)に転宗している。

一口メモ

住職の呼称

座主	天台宗
管長	曹洞宗 (両本山を代表する時)
貫長	真言宗
貫主	日蓮宗
門主	曹洞宗 (両本山別々の時)
	浄土宗
	浄土真宗

●明覚禪師の文字庚申塔

・建立 勝林寺台21世住職の太道寛山大和尚

・曹洞宗の開祖道元禪師の600回忌を執り行つた臥雲童龍

・大和尚の書体。朝廷より禪師号が与えられている。

・「禪師号」は禅宗の徳僧に朝廷より与えられる称号。

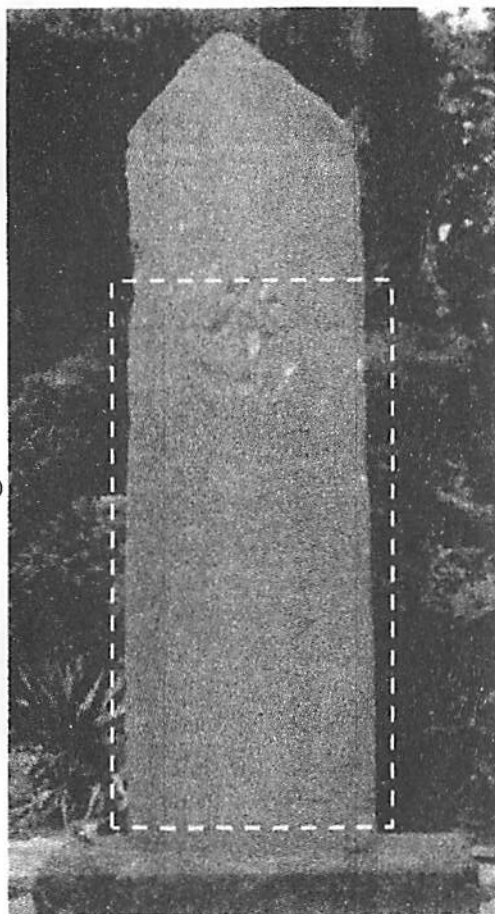
(禅宗) 例 曹洞宗 道元禪師

臨済宗 栄西禪師・一休禪師

黄檗宗 隠元禪師

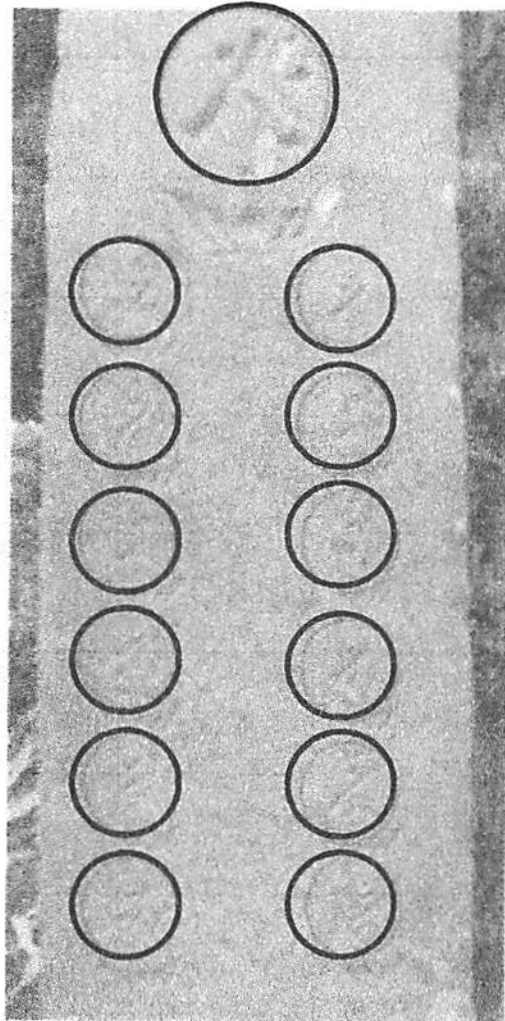


十三仏板碑



- ⑪ 七回忌
阿闍如来
- ⑩ 三回忌
阿弥陀如来
- ⑦ ななのか
七七日
(49日)
薬師如来
- ⑥ むなのか
六七日
弥勒菩薩
- ③ むなのか
三七日
文殊菩薩
- ② かたなのか
二七日
釈迦如来

三十三回忌
虚空蔵菩薩



- ⑫ 十三回忌
大日如来
- ⑨ 一周忌
勢至菩薩
- ⑧ ひきつかいにも
百ヶ日
観音菩薩
- ⑤ いつなのか
五七日
地藏菩薩
- ④ よなのか
四七日
普賢菩薩
- ① しょなのか
初七日
不動明王

● 十三仏板碑 (市指定文化財)

十三仏とは死者に対する初七日から三十三回忌までに至る十三回の仏事供養を掌る十三の菩薩を表したもので、この十三仏信仰が庶民の間に広まったのは中世も半ばごろからと言われる。この板碑は文明3年(1471)銘のもので完全な形で残されており、この種のもものでは代表的なものである。(H 120 cm W 35 cm)

りんせんじ 林泉寺

●林泉寺

写真A

- ・正林山林泉寺 文正元年（1466）本誓承認の開基 浄土宗
- ・本尊 阿弥陀如来（銅造阿弥陀如来立像Ⅱ市指定文化財）
- ・寺伝によると、貞和2年（1346）白衣の行者がオイズルに納めた子安観音を当地に祀り何処ともなく立ち去っていったが、地元の人々は観音の堂舎を建立してこれを納めた。林泉寺ははじめこの観音堂の別当寺であったが、その後観音堂を林泉寺の境内に移したという。

・明治6年増林小学校が林泉寺内に開校されたが、明治44年独立校舎が出来るまで、林泉寺内に置かれていたといわれる。



写真A 林泉寺

・札所

正観音

- ・武蔵国新西国観音霊場
- ・第31番札所
- ・新六阿弥陀
- ・新六阿弥陀
- （天明8年願主受道）

●銅像阿弥陀如来立像（市指定文化財）

写真B

- ・本堂に安置されている銅造阿弥陀如来立像は銅製で、像高さは39.9cm、形状は如来形で大衣を肩にまとい、背面を除く全身は金箔で覆われ、頭部や背面には漆塗りが施されている。
- ・この像の詳しい由来や来歴は明らかではないが、背面腹部から脚部にかけては、鑿で彫られた貴重な陰刻銘があり、文字の一部字体が不明確で読解困難な箇所がある中で、左記のような文字が読み取れる。

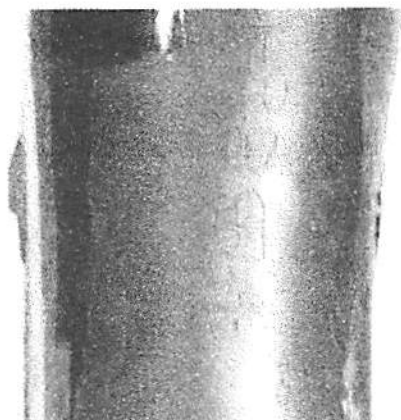
妻女藤原氏

納一□□□

高田國安

永仁五年正月十五日

- ・この文字から拝すると、この像は、おそらく高田國安なる人物とその妻藤原氏が、永仁五年（1297）に、何かしらの願をかけて造立したものではないかということが推測されるが、「高田國安」とは誰であるのか、また、いつから林泉寺に伝わる仏像であるかは文書資料などがなく、ことから実証は極めて難しいといえる。
- ・童子のような小さめの両手先と両足先を持ち、その素朴な表情の中には親しみやすい人肌のあたたかさを漂わせる。また、中世金銅仏としての特長や仏像全身を一鑄するといった素朴な技法・表現などから、地方仏師と地方鑄物師の合作と云った印象が強い貴重な美術工芸品である。



高田國安

背面腹部から脚部にかけて彫られた陰刻銘



観音堂

- ・正観音菩薩
- ・子安観音菩薩
- ・六観音（千手・十一面・馬頭・準胝・如意輪・不空網索）



胎内銘
 嘉元二年 庚申 六月十二日
 新福寺本尊菩薩坐像
 大徳如比丘尼 彫也
 觀音堂門 比呂徳念阿彌陀心
 元応二年 庚申 九月十四日
 此本尊坐像



写真C 観音菩薩坐像

胎内銘

●観音堂（武蔵国三十三観音霊場三十一番札所）
 ・午年四月十八日御開帳（十八日前後の十日間）
 ・木造伝正観音菩薩坐像（昭和56年県指定文化財）
 鎌倉時代後期の作。像多寡4cm。檜材の寄木造り。目は彫眼で、顔・胸などの肉身部は金泥が塗られている。ひざの裏側には僧侶の姿を描いたと思われる戯画が認められる。又、胎内の背面に、鎌倉時代後期の嘉元2年（1304）に新福寺の本尊とともに造立され、元応2年（1320）に至って彩色されたと読み解ける墨書銘があり、数少ない中世の在銘彫刻の一例として貴重である。

写真C

れたと読み解ける墨書銘があり、数少ない中世の在銘彫刻の一例として重要視されている。

(堂内中央)

●子安観音像

純金箔の厨子に安置されている。安産祈願の信仰は現在もあつい。御開帳の日中ろうそくをともす。短くなつたらろうそくは安産のお守を頂きにきた妊婦に渡し、陣痛が始まったら、ろうそくの火をともし、つきるまでには安産すると伝えられている。昔は嫁いだ人たちが花嫁の盛装で参拝し、安産を祈願したという。

●増林の御茶屋御殿

現在御殿町にある「越ヶ谷御殿跡」は、徳川家康が鷹狩の時にたびたび立ち寄った休息御殿である。

・慶長9年(1604)この御殿町に御殿ができるまでは、「御茶屋御殿」としてこの林泉寺在説と城ノ上在説があったといわれる。

・その根拠

1. 現在「城の上」の名が付く小学校や橋名などがある。

2. 林泉寺内の観音堂前に「御殿境内」と刻まれた石塔がある。

「越谷市史 続資料編(一)」の「旧記巻」に

写真D

増林村御殿跡と申候は
当時右村林泉寺境内ニ正観音建置候場所御殿跡と
申石杭ニ記有之由、右村役人榎本氏方承り伝置候

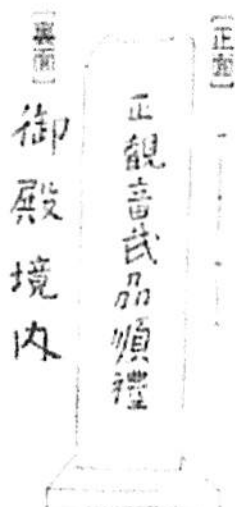
とある。「御殿跡と申す石杭」とは、下部写真Dのことか。

「御殿境内」と刻まれた石塔

写真D



裏面



正面



●**権現井戸** ごんげんいど 写真E

- ・林泉寺に立ち寄った徳川家康に茶を接待した時にその水を汲んだ井戸であったと言ひ伝えられている。
- ・又、家康が口をすすぎ、手を洗ったとも云われている。
- ・今から百年前ほど前までは、清水が湧き出ていたという。



写真E 権現井戸

●**駒止の榎** こまどめ 写真F

- ・江戸時代初頭、家康がこの地方に野遊の折林泉寺に立ち寄り、一休みの際、この榎に馬の手綱を結んだことから「駒止めの榎」といわれるようになったといわれている。

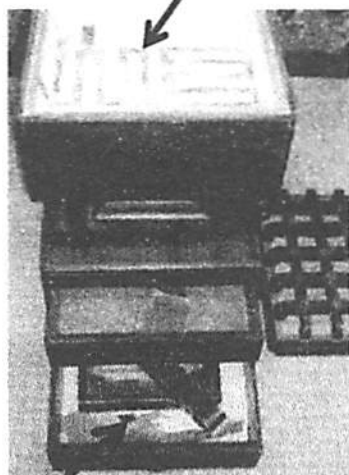
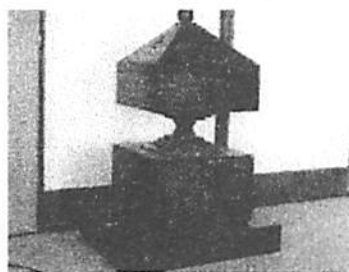


写真F 駒止の榎

- ・この榎の木はマキ科マキ属のイヌマキの変種とされているラカンマキで、推定樹齢430年前後、幹回り1.95m、樹高10m、枝葉すこぶる密でよく繁茂している。その配置は誠に絵画的で美しく、この地域では稀にみる立派な榎である。

●**香炉時計** こうろどけい 写真G

- ・香炉は香をたくのに用いる用具である。
- ・林泉寺所有の香炉は、総高74.7cm、木製のもので明和2年(1765)に、第18代住職が奉納したという銘文があり、音楽法要並びに説法・別時念仏(別れの時の念仏)に用いられてきた。
- ・螺旋状の凹面に抹香を入れ、香の燃え具合によって、時刻がわかるもので、香時計とも呼ばれている。
- ・現在、こうした類の香炉は全国的にみても数少なく貴重な工芸品といえる。



道具入れの引出

分解した香炉

●**住職専用の御駕籠** おかけこ

- ・江戸時代中期より、歴代住職が公式の外出に用いた寺の宝物。
- ・本堂の天井に吊るされ、内側は朱塗りで肘かけ吊綱があり、窓は雨除けの布、日除け簾、窓の三段に作られている。
- ・駕籠の長さ1.2m、幅0.9m、高さ1.2mの大きさで立派なものである。寺侍が上人の御供をする時、持って歩いた槍、薙刀なども保存されている。

しろのうえはし 城ノ上橋

- ・城ノ上は徳川家康の御殿が増林の地に設けられたことから名付けられたものであろう。
- ・当時地元の人々はこの御殿を「お城」と呼び、このあたり一帯を城のあるところ、つまり城ノ上と呼んだとも考えられる。

鷹匠橋

●鷹匠橋と榎本家と榎本巨峰園

- ・代々、増林村の名主を勤めた榎本家は、榎本家の記録によると大坂落城のときの落武者であったという。明和7年(1770)より増林村の名主を勤め、寛政元年(1789)より野廻り役を兼ね、苗字帯刀を許された。現在もこの地で観光ぶどう園を営む。
- ・野廻り役とは鷹匠頭支配の鷹場を管理する役人である。なお野廻り役は將軍家では鳥見役と呼ばれている。

- ・この鷹場御用で廻村中の鷹匠はしばしば榎本家を訪れていたよう
- で、越ヶ谷宿から増林に架せられた橋は特に鷹匠橋と呼ばれた。

●鳥見役の職務

- ・鷹場内の家作の新規取立てをはじめ、新增築や水車などの許可、鷹狩りの道筋の屋敷改め、屋根替、立木伐採の許可・地頭・村役人などの交代届・飼犬改・田船改・堀沼浚・餌の献上・殺生魚獵の取締・相撲・花火・芝居などの諸興行の取締など、農民生活全般にわたって幅広い規制の権限を持っていた。

- ・こうした鳥見役の権限は当時鷹場が支配関係を超えて設定されて

いたことから領主の支配権を侵害する面もかなりあり、鳥見役の中には、この特権をかさに非常に威圧的な態度をとった者もあり、農民は二重の負担に苦しむことが多かった。

●鷹場の範囲

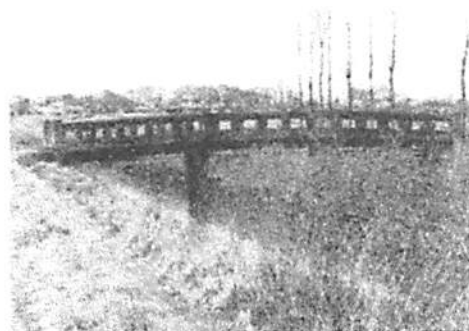
- ・鷹場は寛永5年(1628)には江戸近郊、大体5里ほどの村が指定され、越谷の近辺では草加あたりまでが組み入れられていたようだ。

- ・次いで寛永10年には、御三家にも鷹場が与えられ、その場所は將軍の鷹場の外側にあたり、江戸から5里から10里の間の地点にあつたようで、東から水戸・紀伊・尾張の順に配置された。

- ・鷹場を与えられる資格は、このほか御三卿・家門・大藩主・幕府の重臣などに限られ、また借場といって、將軍の鷹場を借りて放鷹した。越谷地方では、西の七左衛門から南の蒲生にかけて、紀伊家の鷹場に指定されていた。



鷹匠橋の今昔



■スナツカラ地蔵

●花田の地蔵伝説

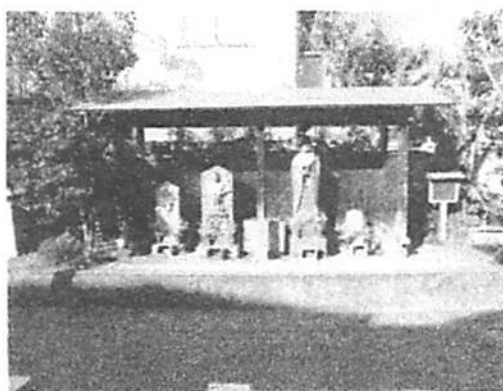
江戸時代初期、元荒川が花田村を囲むように曲流していた頃の話で、いくつか伝説がある。

(1) ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があった。花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなつた。そこで人々は運ばれていたこのお地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし堤の上へ上げてお祀りしたという。

(2) 地蔵の石仏を載せた大型の船が、海の幸で財をなした人が、秩父の札所に送り届けたいとの希望で、海から元荒川を上つてここまで来た。さらに上流に行くためにここにとどまり、元荒川の澤(みぞ)で川の水が増えるのを待っていた。増水するやいなや一気に上流へと川を上ろうとしたが、強風にあおられて船が河原に乗り上げてしまった。そこでこの地蔵はここにとどまりたいのであろうと思い、見晴らしの良いこの地に安置された。

●花田の地蔵

・承応4年(1655)、源海和尚三十三回のために造立された。
・像の台座に「武州葛西領東葛西之庄上ノ割下小合村」とあることから、下小合村の現在地名「水元」から現中川を上り、現元荒川に入つて、この花田に地に至つたという。



川堤にあった頃のお地蔵さん



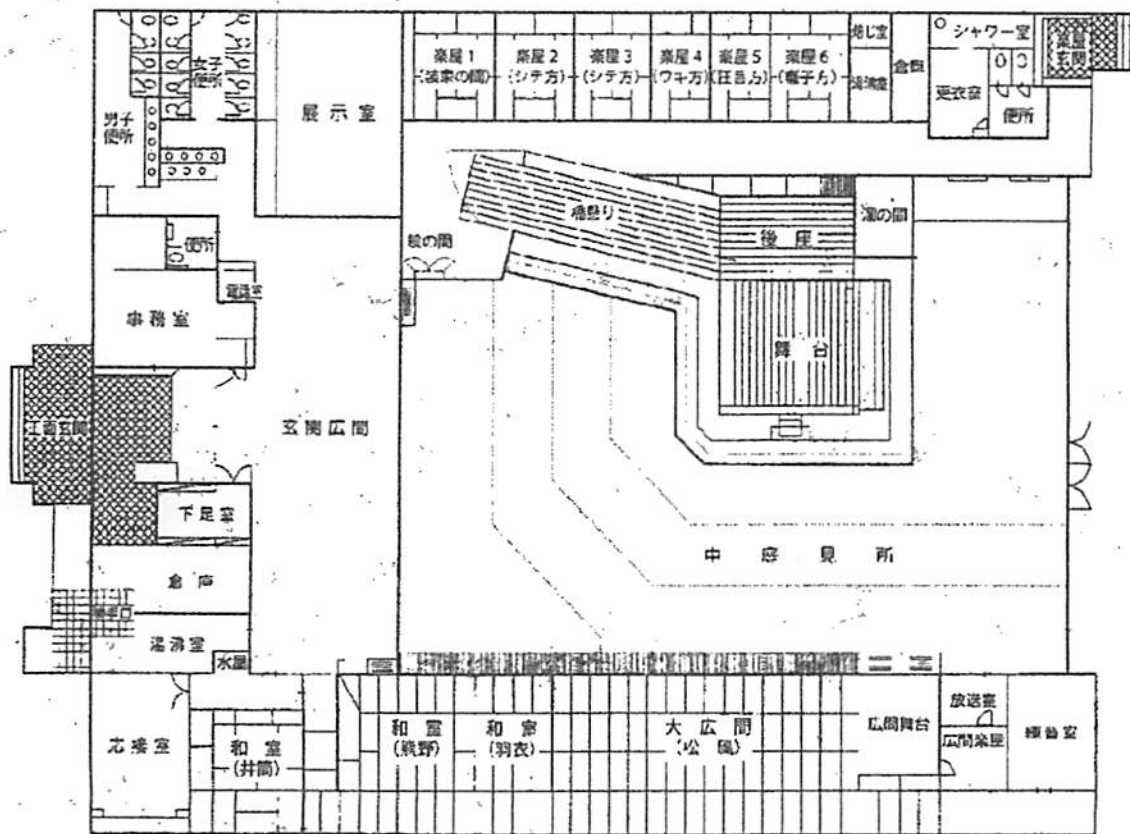
花田のお地蔵さん

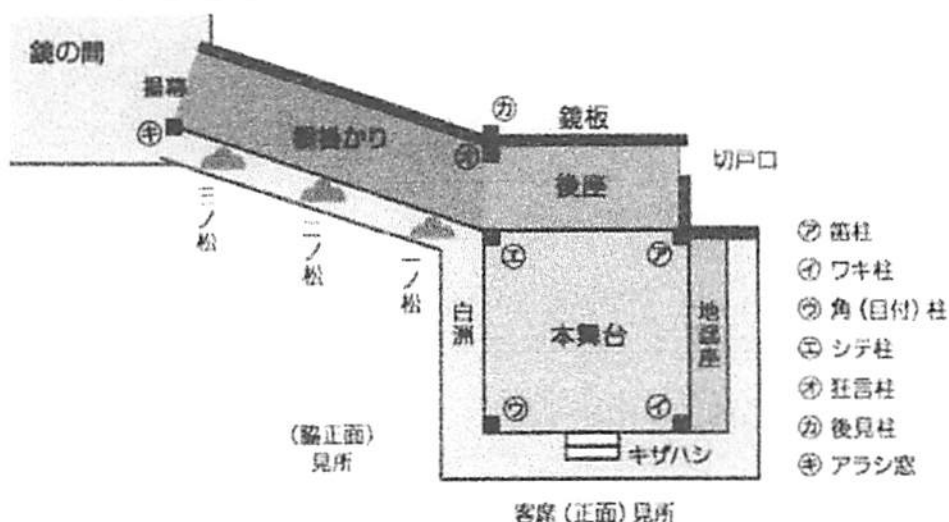
越谷能楽堂

- ・越谷能楽堂は、「花田苑」の北側に隣接し、日本の伝統芸能の振興としての役割のほか、市民のコミュニティの場としても利用され、平成5年市営として開館された。
- ・天然の木曽檜をふんだんに使用した能舞台は、舞台（5.91四方）・地揺座・後座・橋掛りなどからなる能楽堂である。
- ・展示室では面や装束などが見る事が出来、和室などが貸出されている。
- ・北側の花田苑は面積2.1ヘクタールの敷地からなり、江戸時代の名主・宇田家の長屋門を原寸大で復元した正門がある。



能舞台正面





- 本舞台** 4本の柱に囲まれた正方形の舞台。1辺約6m
- 鏡板** 正面奥の松の木が描かれた板。松は1年中緑であることから、長寿の象徴とされ、とくに古い松は神様がここに降りてくる神聖な木と考えられている。
- 階** 舞台が野外にあったときのなごりで、昔は能奉行という役目の人がここから舞台にあがり、「お能、はじめませい」と声をかけて能がはじまった。現在はほとんど使われ事はない。
- 白州** 舞台が野外にあったむかしは、別棟から庭をへだてて舞台を見ていた。その間に敷かれていた白い玉石は、太陽の光を反射して自然の照明効果を与えていたといわれている。
- 橋掛り** 舞台の一部で、揚幕の奥にある鏡の間と本舞台をつなぐ通路。
- 後座** 囃子方及び後見が着座する。

■ 能について

● 能ってなんだろう

・能の主人公の多くは能面という仮面をつけ、能装束というはなやかで美しい衣装をまとっている。ゆつたりと動きながら、謡うたいと呼ばれる独特の節回し歌をうたい、セリフをかたり舞を舞う。

● 能っていつごろから

・日本の伝統芸能のなかでも長い歴史をもつ能は、いまから650年ほどむかしの室町時代に、現在のスタイルに近い形ができた。

・しかしおおもとは、約1300年前の奈良時代、中国から伝わってきた散楽さんかくにルーツがあるといわれている。

・散楽とは、宙返りをしたり、口から火を吹いたりして、人をあっと驚かす曲芸や手品のようなものだったと考えられている。

・時代が進むにつれ、さまざまな芸能の影響を受けて曲芸的な面はだんだんとうすまっついていき、かわりに、曲芸的なものまねふうのおもしろいおかしい劇や、田植えのさいに豊作を願う舞などがとりいれられるようになる。やがてその舞の部分が能に、劇的な部分が狂言に、2つの流れに発展していったと考えられる。

● 能の形をととのえたのは

・室町時代のはじめに、能の形をととのえたのが、観世家かんせけの先

祖である観阿弥・世阿弥せあみの親子であった。

・室町幕府3代将軍・足利義満の大変気に入ったこともある。

● その後は

・以来、能は信長・秀吉・家康と代々の権力者に好まれ、支えられた。

・江戸時代になると、幕府の様々な行事の際に行う公式芸能である「式楽しきかく」として取り上げられて、現代に伝わる伝統芸能としての基盤を築き上げた。

● 能舞台

・能・狂言を上演する舞台が能舞台である。

・古い時代の舞台はほとんどが屋外にあったが、いまでは国立能楽堂をはじめ、能楽堂という建物の中にあるのがふつうである。

・寺社の祭礼や式典のさいに演じられていた江戸時代までと違って、明治以降、一般の人がチケットを買ってみる公演として定着するにしたがって、天候に左右されず上演できる劇場として現在のようになつた。

● 能の「ことば」

シテ 能の主人公

ワキ シテの相手役で現実の人間役故、能面をつけない。

アイ 能の中で狂言役を演じる役。

囃子はやし 笛・小鼓・大鼓・太鼓の演奏者。

地謡ぢうたい 「謡」と「語り」を演じる役。8人が基本
後見 登場人物の演技をたすける役。

円空仏御開帳(武蔵国三十三観音霊場大開帳)

●武蔵国三十三観音札所は、吉川市・越谷市・草加市・松伏町・三郷市・八潮市・川口市・東京葛飾区・足立区の地域の寺院に番外の二寺院を加えた三十五ヶ寺で構成される観音霊場。「秩父三十四ヶ所観音札所」について古い。

●吉川市吉川の延命寺から始まり、三郷市↓葛飾区↓八潮市↓足立区↓川口市↓越谷市↓松伏町の各地の札所を巡り吉川市の東泉寺で終わる。

●大相模(越谷市)の真大山大聖寺第16世円妙和尚が、元文3年(1738)に記した版木本「武蔵三十三観音巡礼縁起」にその由来、巡礼順位、御詠歌などが記されており、それによると、二郷半領吉川村の観音信仰に厚い篠田太郎兵衛・田村門三郎という二人が、夢に名僧の御啓示を得て、元禄16年(1702)に各霊場を巡拝し霊場の巡拝路を記して、武蔵国三十三観音札所を開いたとされている。

●御開帳は十二年ごとの午年四月十八日(実際は四月十日〜二十日)に行われる。

●なぜ午年かは、馬が観音様の眷属(仏や菩薩に従うもの)であるからと、また馬は上昇機運が高まるからだという。

左は「円空作木造千手観音立像」(武蔵三十三観音札所・吉川市大経寺・県指定文化財)は釘で打ちつけ、腰下は2つの古田材(樺)を転用している。



越谷の宗派別寺院一覧

(菅波昌夫氏資料)

宗派		寺院名	開基年	本尊	所在
真言宗	1	清蔵院	天文3(1534)	十一面観世音菩薩像	蒲生
	2	光明院	弘治2(1556)	阿弥陀如来	蒲生
	3	地藏院	宝永元(1704)	地藏菩薩	蒲生
	4	成就院	元和年間(1615~24)	阿弥陀如来	川柳
	5	智泉院	天正年間(1573~92)	大日如来	川柳
	6	照蓮院	天正10(1582)	大日如来	瓦曾根
	7	光福院	寛永18(1641)	阿弥陀如来	大間野
	8	観照院	元和2(1616)	阿弥陀如来	七左
	9	照光院	安永6(1677)	阿弥陀如来	大沢
	10	光明院	天文6(1537)	十一面観音菩薩像	大沢
	11	迎撞 <small>ごうしょういん</small> 院	天文4(1535)	阿弥陀如来	宮本
	12	東福寺	文永年間(1264~74)	虚空蔵菩薩	東越谷
	13	弘福院	慶安年間(1648~52)	阿弥陀如来	北越谷
	14	浄光寺	天正11前(1583前)	聖観世音菩薩	北越谷
	15	観音寺	貞享5(1688)	十一面観世音菩薩像	大成
	16	大聖寺	天平勝宝2(750)	不動明王	相模
	17	金剛寺	天文18(1549)	聖観世音菩薩	東
	18	宝正院	天文21(1552)	大日如来	増林
	19	玉泉院	元禄3(1690)	阿弥陀如来	南越谷
	20	一乗院	元仁元(1224)	阿弥陀如来	三野宮
	21	徳蔵寺	不明	十一面観音菩薩像	大吉
浄土宗	1	報土院	天正10(1582)1582)	阿弥陀如来	登戸
	2	浄音寺	文禄3(1594)	阿弥陀如来	大成
	3	林泉寺	文正元(1466)	阿弥陀如来	増林
	4	聖徳寺	天正2(1574)	阿弥陀如来	北川崎
	5	清浄院	嘉元元(1303)	阿弥陀如来	大松
	6	無量院	元禄10(1697)	阿弥陀如来	舟渡
	7	林西寺	嘉暦年間(1326~42)	阿弥陀如来	平方
	8	安国寺	暦応年間(1338~42)	阿弥陀如来	大泊
	9	天嶽寺	文明10(1478)	阿弥陀如来	越谷
	10	西教寺	元龜3(1572)	阿弥陀如来	西新井
	11	正光院	正徳年間(1711~6)	阿弥陀如来	大間野
曹洞宗	1	勝林寺	天文元(1532)	十一面観音菩薩像	増林
	2	大林寺	宝暦10(1760)	白衣観世音	大林
	3	浄山寺	貞観2(860)	延命地藏尊	野島
浄土真宗	1	法光寺	元和元(1532)	十一面観音菩薩像	三野宮
	2	光善寺	不明	不明	三野宮
天台宗	1	三明寺	安政7(1860)	不動明王	七左
日蓮宗	1	能持寺	昭和43(1968)	不明	川柳

附一
越谷市文化財

有=有形文化財 建=建築物 絵=絵画 彫=彫刻 工=工芸品 古=古文書 考=考古資料 歴=歴史資料
有民=有形民俗文化財 無民=無形民俗文化財 記=記念物 史=史跡 名=名勝 天=天然記念物 旧=旧跡

地区	番号	指定	種類	名称	所在地	地区	番号	指定	種類	名称	所在地
桜井	1	市	有古	代々の朱印状	林西寺		37	市	有歴	せいぞういん 清蔵院の山門	清蔵院
	2	市	有歴	どんりゅうしょうにんくようぼせき 吞龍上人供養墓石	林西寺	川柳	38	市	記天	田中家のクスノキ	個人蔵
	3	市	有影	あんこくじ 安国寺の円空仏	安国寺		39	市	有建	だいしょうじ 大聖寺の山門	大聖寺
	4	市	有影	もくぞうあみだにらりゅうどう 木造阿彌陀如来立像	安国寺		40	市	有古	ほうじょうじしげおきてがき 北条氏繁提書	大聖寺
	5	市	有古	かたこくし 観智国師書状	安国寺		41	市	有歴	徳川家康の夜具	大聖寺
	6	市	無民	下間久里の獅子舞	下間久里 香取神社	大	42	市	記天	だいしょうじ 大聖寺のタブノキ	大聖寺
	7	市	有民	だいろくてんのさんがく 第六天の算額	個人蔵		43	市	有考	じょうおう2ねんこうしんとう 承応2年度申塔	個人蔵
	8	市	有民	かんのんどうのえんにちふうけい[えま] 観音堂の縁日風景[絵馬]	大泊観音堂	相	44	市	有考	てんもん22ねんみださんぞんずういたて 天文22年弥陀三尊圖像板碑	個人蔵
	9	市	記天	森家のイチヨウ	個人蔵		45	市	有考	ぶんな3ねんろくじみょうごういたび 文和3年六字名号板碑	個人蔵
新方	10	市	記史	しょうじょういんかいざんぶか 清浄院開山塚	清浄院	模	46	市	記史	みたかたにいせき 見田方遺跡	遺跡公園
	11	市	有影	もくぞうあみだにらりゅうどう 木造阿彌陀如来座像	清浄院		47	市	有考	にじゅういちぶついたいしとうば 廿一仏板石塔婆	金剛寺
	12	県	無民	北川崎の虫追い	川崎神社		48	市	記天	中村家のクスノキ	個人蔵
	13	市	記天	しょうとくじ 聖徳寺のイチヨウ	聖徳寺		49	市	有建	中村家住宅付表門	レイクタウン
増林	14	県	有影	もくぞうでんまさかんのんぼさつざう 木造伝正観音菩薩坐像	林泉寺	大	50	市	有影	香取神社の彫刻	香取神社
	15	市	記天	りんせんじこまどめ 林泉寺駒止のマキ	林泉寺	沢	51	市	有古	本陣資料一括(福井家文書)	県立文書館
	16	市	有工	りんせんじ こうろ 林泉寺の香炉	林泉寺		52	県	記旧	ひらたあつたわかくうあと 平田篤胤飯窩跡	久伊豆神社
	17	市	有影	もくぞうあみだにらりゅうどう 銅像阿彌陀如来立像	林泉寺		53	県	記天	久伊豆神社のフジ	久伊豆神社
	18	市	有考	ぶんめい3ねんじゅうさんぼとけいたび 文明3年十三仏板碑	勝林寺		54	市	記史	こしがやござんくひ 越谷吾山句碑	久伊豆神社
	19	市	有考	にじゅういちぶついたいしとうば 廿一仏板石塔婆	個人蔵		55	市	記名	ひさしいずじんじやしやそう 久伊豆神社社叢	久伊豆神社
	20	市	記天	中村家のイチヨウ	個人蔵	越	56	市	有歴	ひらたあつたわほうのうだいえま 平田篤胤奉納大絵馬	久伊豆神社
	21	市	有絵	さいとうとよさく 斎藤豊作遺作「風景」	市立図書館		57	市	有工	かけぼとけ 懸仏	久伊豆神社
	22	市	有絵	ちやうぶんさいえいしひつ 鳥文斎栄之筆「瓦曾根溜井図」	市立図書館	ケ	58	市	記天	ラクウショウ	アリタキ園
大袋	23	市	有古	にしかたむらきゆうき 西方村旧記	市立図書館		59	市	有影	もくぞうしゃかにらりいねはんぞう 木造釈迦如来涅槃像	天巖寺
	24	市	有工	じやうじ6ねんなんじだいくいたび 貞治6年七字題目板碑	個人蔵	谷	60	市	有歴	こしがやござんくようぼせき 越谷吾山供養墓石	天巖寺
	25	市	有古	いちじょういん 一乗院の建具	一乗院		61	市	有考	けんこうがなんいんいたび 建長元年板碑	御殿町
	26	市	有工	のじまじょうざんじのおおわにぐち 野島浄山寺の大門口	浄山寺		62	市	記旧	越ヶ谷御殿跡	御殿町
	27	市	有古	じょうざんじ 浄山寺の朱印状	浄山寺		63	市	有古	いなびざんさしそえしよ 伊奈備前差添書	個人蔵
	28	市	有古	寺領寄進朱印状	迎摂院		64	市	記天	ありたきけ 有瀧家のタブノキ	個人蔵
	29	市	有影	もくぞうあいたしちざえもんふらうざう 木造金田七左衛門夫婦坐像	観照院		65	市	記天	せんげんじんじや 浅間神社のケヤキ	浅間神社
	30	市	有影	せいふくいん 西福院の円空仏	西福院		66	市	有歴	こしがやじゆんせいがい 越ヶ谷順正会関連資料	市役所・図
	31	市	有歴	会田家歴代の墓所	個人蔵	大	67	市	有影	もくぞうごちんりゅうどう 銅像五智如来立像	浄光寺
蒲生	32	市	有歴	おびしやさいけいいちよ 越巻中新田の産社祭礼幟	個人蔵	沢	68	市	有影	こうふくいん 弘福院の円空仏	弘福院
	33	市	有影	木造地藏菩薩立像	照蓮院	北	69	国	記天	越ヶ谷のシラコバト	越谷市周辺
	34	市	記旧	せんとうまるくようとう 千徳丸供養塔	照蓮院	越	70	市	無民	きやりうた 越谷の木造歌	市内
	35	市	有歴	窮民救済の碑	照蓮院	大	71	市	有民	三野宮卯之助力石	香取神社
36	県	記史	蒲生の一里塚	愛宕町	袋						

参考資料

- ・郷土研究会資料・ホームページ
- ・「越谷市の文化財」
- ・「越谷の歴史物語」
- ・「越谷ふるさと散歩」
- ・「わたしたちの郷土こしがや」
- ・越谷市史
- ・寺院縁起・寺院説明版
- ・その他

越谷市郷土研究会
 越谷市教育委員会
 同
 同
 同
 同
 各寺院

バス時刻表

花田小学校前～越谷駅行	12時	10	24	39	53		
	13時	08	22	36	52		
花田苑入口 ～南越谷駅行	12時	08	18	30	38	50	58
	13時	08	18	30	38	48	58

林泉寺

正林山 徳泉院



交通

バス：JR武蔵野線「南越谷駅」南口発 タローズバス
「松伏 ターミナル行」で約17分「上二区」下車 徒歩2分
車：東武伊勢崎線「越谷駅」より10分



武蔵国観音霊場 第三十一番札所

ご詠歌 ゆきくれて
のでらのかねの きこゆるは
このしもかげの ましばやしでら

浄土宗

正林山 徳泉院 林泉寺

〒343-0011 埼玉県越谷市増林3818
TEL:048-963-0422 FAX:048-966-9705



鎌倉後期 永仁五年（一二九七）

市文化財 當寺本尊 銅造阿彌陀如来



武蔵国観音霊場第三十一番札所
鎌倉後期 嘉元二年（一三〇四）

県文化財 木造伝 正観音菩薩

林泉寺のご案内

創建 平僧寺
開山 上人寺
鎌倉後期 永仁五年(一二九七)
室町中期 文正元年(一四六六)

県文化財
市文化財
市文化財
市天然記念物

木造伝 正観音菩薩
當寺本尊 銅造阿弥陀如来
林泉寺の香炉(香時計)
駒止のマキ(徳川家康手綱止めの榎)
鎌倉後期 嘉元二年(一三〇四)
鎌倉後期 永仁五年(一二九七)
江戸中期 明和二年(一七六五)
推定樹齡 四五十年前後

本堂

観音堂

阿弥陀三尊(阿弥陀如来 観音・勢至菩薩)
内陣 天井画(六十三枚)
御駕籠
江戸前期 延宝元年(一六七三)
江戸時代 宝暦十二年(一七六二)

子安観世音菩薩
子安観世音厨子
六観音(千手・十一面・馬頭・準胝・如意輪・不空羅索)
江戸前期(一六〇〇年代)安置
江戸中期 享保十四年(一七二九)
江戸中期 正徳元年(一七一〇)

赤門
鐘楼堂
浄泉院
地藏堂
不動堂

地藏菩薩
不動明王
江戸中期 正徳二年(一七一〇)
江戸中期 宝暦六年(一七五六)
江戸中期 延享五年(一七四八)
江戸時代

薬師堂
客殿
浄泉殿

薬師三尊(薬師如来 日光・月光菩薩)
江戸初期(一六〇〇年代)
平成五年(一九九三)
平成二十一年(二〇〇九)

史跡

徳川家康「御殿境内」石標
(裏面「正観音武州順禮 第三十一番」)
徳川家康「権現井戸之跡」
三田岬景行墓所(越前 朝倉氏家臣末裔)
徳本上人名號碑
江戸初期(一六〇〇年代)
昭和十二年(一九三七)
万治三年(一六六〇)
文政二年(一八一九)

その他

庭園墓地「いずみ浄苑」
永代供養塔
平成二十年(二〇〇八)
平成二十年(二〇〇八)